

「便所くんプロジェクト」という市民活動

— 不登校経験者の高校生を中心とする「他者」「モノ」「街」との出会い —

兵 藤 友 彦 (愛知県立刈谷東高等学校)

川 北 稔 (愛知教育大学大学院 教育実践研究科)

The Civil Activities of the Benjokun Project:

The Experience of School Non-Attendance and Encounters with Others, Objects, and Towns

Tomohiko HYODO (Kariya Higashi High School)

Minoru KAWAKITA (Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education)

要約 便所くんプロジェクトは、刈谷東高校の演劇部が発起人となって始まった市民活動である。同校には、不登校経験者の生徒が多く在籍し、卒業後の社会参加にも困難を抱えている。プロジェクトは不登校経験者への一方的な理解や支援ではなく、自らの「生きづらさ」に気づいた人々が、地域の中で対等な立場で出会うことを目指す。活動は、ワークショップとオブジェ製作、演劇の上演という要素が緩やかに結びつきながら展開される。本稿はプロジェクトの1年目の成果から、市民活動の対等性や相互性の実現について検証する。

Keywords : 不登校, ひきこもり, 生きづらさ, 市民活動の対等性・相互性

1. はじめに

2008年の夏も終わりに近づく8月24日、名古屋市中区大須の商店街を、便器を模した3メートルのオブジェがパレードした。このオブジェは、演劇「便所くん～男だけの世界」の登場人物、「便所くん」である。劇中で「便所くん」は、人との関わりから遠ざかり、便器になってしまった人物として描かれている。その「便所くん」が、3日間の上演を終え、演劇の世界から外へと歩き出したのである。

本稿は、このパレードによってハイライトを迎えた「便所くんプロジェクト」の実践を報告し、意義と課題を検討する。

2. 刈谷東高校と便所くんプロジェクト

2.1 活動の背景：不登校から卒業後の「生きづらさ」へ

便所くんプロジェクトは、刈谷東高校の演劇部が発起人となった市民活動である。

昼間定時制高校である刈谷東高校は、入学する生徒のうち、中学校で不登校を経験した割合が7割に達している。不登校を経験したのちに刈谷東高校に入学してきたことは、多くの生徒や保護者にとって安心材料となる。しかしその喜びも束の間、高校に通えなくなったり、中退してしまったりする生徒も存在する⁽¹⁾。

また、高校に休まず通って卒業した生徒も、順風満帆とは限らない。大学に入った生徒が学校になじまず

退学してしまい、次の年の入試に出願するため、調査書ももらいに学校へ戻ってくる。高校の時に何の問題も起こさず、大人しく過ごした生徒が、卒業後に人間関係を失ってしまう例も多い⁽²⁾。

果たして、高校を型どおり卒業させるだけで学校の仕事は終わりなのだろうか。卒業後につまずく生徒たちを前に、何もできることはないのだろうか。そうした苦い思いを教員（筆者の兵藤や、演劇部顧問の原田常弘教諭）は抱えてきた。便所くんプロジェクトは、こうした卒業後の「生きづらさ」を正面から見据えるなかから構想された。

2.2 活動の対等性・相互性：居場所から「出よ」、自分を「揺らせ」、平場で「つながろう」

便所くんプロジェクトは、地域の人の力を借りながら活動を成功させることで、高校生たちが自分で生きていける力をつけることを一つの目的としている。高校や演劇部に安住するのではなく、居場所から出ること、高校生たちは世界を広げていく。

しかし、こうした「居場所への安住」は、不登校を経験した高校生たちだけが抱える課題ではない。

刈谷東高校の教員自身が、教員の世界の狭さを感じている。「広い社会で生きる力を身につけよ」と説く教員が、住まいである教員の宿舎に落ち着き、交流の範囲も教員同士にとどまり、教員の世界に自足してはいないだろうか。

プロジェクトは、高校から離れて、地域での市民活動として展開される。この活動は、世界が狭まった教

員自身の「リハビリ」でもある。自らを広い世界の中でとらえなおし、固定した価値観を揺り動かすこと。これを表現した言葉が、「自分を揺らせ」である。

このプロジェクトは、地域からの参加者たちに対しても、「居場所から出ること」「自分を揺らすこと」を求める。市民活動は、時として、一方的に誰かを「助ける」活動であることに満足してしまう。よって、自分自身が抱える「生きづらさ」を見つめることには思い至らない。とりわけ不登校の子どもをめぐる活動は、上位に立つ大人たちが「傷ついた子どもたちを救う」あるいは「社会性を身につけさせる」姿勢に陥ってしまう。このような上下関係を前提した活動と異なり、プロジェクトでは、自らの「生きづらさ」に気づききっかけとなることを目指す。そして互いに対等な場所で、すなわち「平場でつながる」ことを理想とするのである。

こうした参加者の間に対等性や相互性を生み出すため、活動内容には独自の工夫がほどこされている。以下では、演劇「便所くん」の内容と、演劇表現ワークショップから、活動の対等性や相互性を読み取ることにする。

3. 演劇「便所くん～男だけの世界」

演劇「便所くん～男だけの世界」は、学校内での居場所を失った男子生徒の世界を描いている。

演劇は、学校の中で他生徒からの暴力的な「いじめ」に遭った男子生徒を主人公とする。ストーリーは、この生徒が使われなくなったトイレに逃げ込むことから始まる。このトイレの中で、ひとつの便器が生徒に話しかける。「便所くん」である。「便所くん」は生徒を友達と呼び、生徒も、唯一「便所くん」に対して自分の思いを語りだす。しかし演劇の後半、この小さな「居場所」から、生徒は自分の意思で出てゆこうとする。

居場所から出ていく主人公の行動は、力強く胸に迫るクライマックスを形作っている。一方で、ストーリーは、見る者のなかに、複雑な余韻を残したまま終わる。

この劇では、単なる「居場所へのひきこもり」や、「ひきこもりからの脱却」が描かれているのではない。

男子生徒は、まず「喋る便器」という非現実的な存在と接し、やがて「便所くん」の世界に居場所を見つけることになる。この世界の中で、主人公は初めて、自分が抱えている感情を他者に打ち明けることができる。しかし、安心できる居場所だけで生きていこうとすれば、知らず知らずのうちにそこに閉じ込められてしまう。男子生徒は、居場所のなかで、「便所くん」との間で体験したことを否定するのではなく、それを

抱えたままで現実の世界に踏み出そうとする。主人公は、これら非現実的な世界と現実的な世界、居場所の内側と外側を、行き来する役割を与えられている。

多くの人は、人との接触を避けるような「ひきこもり」とは無縁に生活しているはずである。しかし、自分の世界に安住したいという気持ちを多少なりとも持っている。人はそんな小さな居場所でしか、自分の思いを表現することができずにいる存在なのかもしれない。こうした居場所へのひきこもりは、単純に否定されるべきではない。

人が居場所を必要とする存在であることを認め合いつつ、そこを出てつながり合う勇気を肯定する。そして、居場所から出ようとする者同士が支え合う。それが「便所くん」のメッセージであるように思われる⁽³⁾。

4. 他者との出会い、モノとの出会い、街との出会い

具体的な便所くんプロジェクトは、他者との出会い、モノとの出会い、街との出会いを目指す3つの活動を中心に展開されている。

4.1 演劇表現ワークショップ（他者との出会い）

演劇表現ワークショップは、簡単な活動を通じて、自分自身の振る舞いの特徴を知ったり、他者を感じたりすることを目標にしている。

(1) 割り箸を使ったワーク 2人の人が目をつむって、互いの人差し指だけで割り箸を支える。その状態で立ち上がり、どちらかの1人がその場で1回転し、再度2人でタイミングを合わせて座る。回転するときは、相手の気配を感じ、同時に自分が「ここにいるよ」という気配を伝えなくては、うまく回ることができない。

(2) 背中合わせで立ち上がるワーク 2人の人が背中を合わせて立つ。相手に依存し、もたれかかっているだけでは立てない。逆に、自分だけで立とうとしても立てない。相手の背中を感じ、力のありかを探り合いながら、共に立ち上がる。上手く立てたときには、余計な力が入らず、すっと立つことができる。

ワークは、言葉ではなく自分や他者の身体のありようを見ることに狙いがある。口で何を言っても、身体は別の自分のありようを伝えている。「身体は正直」なのである。

また、同じワークでも、相手が変わるとうまくできたりできなかつたりする。その場限りの他者と関係を築くことの楽しさや難しさを知ることができる。

ワークを実際に体験すると、不登校経験者にはできることが、参加者にはできないことがある。このことによって、「不登校経験者」と「その他」の垣根がなくなる。ワークショップは、自分自身が人とかかわることの難しさを実感し、「平場でつながる」ひとつの道筋になっている。

ワークショップは、三河地区、尾張地区で数多く開催された（本稿末尾の「便所くんプロジェクトをめぐる主な動き」参照）。以下、参加者の声を紹介する。

- 人とのコミュニケーションは積極的になる事だけでなく、じっと待つことも大事だと、よく分かりました。（2008年4月12日）
- 今までずっと、頭で自分は「攻め」の人間だと思っていたが、今日ワークをやって、受身な自分に気づくことができた。（同）
- 最初の頃にあった、初対面の人に対する恐怖感が最後には消えていた。同時に、初対面の人に対して恐怖感を覚えてしまう自分にも気づくことができた。（同）
- 心と身体に関連性がとても分かりやすく実体験できました。身体をあずける、他人を受け入れるということは、言葉では一言で表現できますが、実際にそれができるようになるには、多くの経験とプロセスが必要だと思います。このようなワークショップはそういうことに気づかせてくれる大きなチャンスになると思いました。（2008年4月26日）
- 全く知らない人が集まって、同じことをする。気持ちを通じた時は、手をたたいて喜ぶ。そんな少しの時間でしたが、楽しく過ごせました。これから自分の子どもや友だちとかかわるときにも意識してみようと思います。（2008年5月17日）

4.2 オブジェ製作（モノとの出会い）

オブジェ製作は、愛知教育大学美術実習棟で、美術教育講座の教員（宇納一公教授）や彫刻専攻の大学院生や学生が中心になっておこなわれた。

8月から、3メートルの「便所くん」オブジェや舞台の内装の製作が開始された。3メートルのオブジェは、発砲スチロールを削って形をつくり、白く着色し、表面に樹脂を塗って仕上げられた。

演劇の舞台を演出するための内装も、美術棟で製作された。トイレの備品を意味する巨大なデッキブラシ、バケツなどである。

また、トイレ自体が「ひきこもった世界」であることを演出するために、「他人の目」を意味する巨大な目や、無数の小さな目が作られた。巨大な目は、便器のオブジェ同様に発砲スチロールで製作された。

8月の製作期間中、3日間は一般の参加も募って、

「モノとの出会い」を共有することを試みた。ワークショップの参加者などを中心に、1日あたり数人の参加がみられた。残念ながら、オブジェ製作の日程の決定が遅れたため、参加を表明していても日程が合わなくなった人がいるなど、想定よりも少なめの参加人数となった。一方、一般参加の日だけでなく、オブジェ製作の追い込みの数日間に渡り、日没後も参加を続けた参加者（豊田市のKさん）がいたことは付記しておきたい。

4.3 「便所くん」セツ寺講演（街との出会い）

プロジェクトのハイライトとなる演劇「便所くん」の公演は、8月22日から24日までの3日間にわたって名古屋市中区大須のセツ寺共同スタジオでおこなわれた。セツ寺共同スタジオは、1970年代初期からの歴史をもつ小劇場である。公演とパレードに先立って、プロジェクトのメンバーが商店街への挨拶を済ませた。

3日間で4回の公演には平均して70人ほどが集まった。収容定員を上回るような集客ぶりである。

公演が終わるごとに、舞台の上でワークショップが行われた。最後に、参加者が願い事を書いた紙をオブジェに張り付けるというイベントが用意された。

最終日には、ワークショップのあとに「便所くん」のオブジェが劇場を出て大須の商店街をパレードした。オブジェのまわりでは、段ボールをかぶった生徒たちが取り囲んだ。

5. 緩やかな結びつき：その成果と課題

5.1 成果

便所くんプロジェクトは、上述したような「他者との出会い」「モノとの出会い」「街との出会い」のそれぞれが、ゆるやかに結びつくことを意図している。

実際に、ワークショップの参加者が、数多く演劇の公演に足を運んだ。生徒たちは情報宣伝活動に数十か所を回ったが、実際に顔を合わせてプロジェクトを説明した相手が、ワークショップや演劇に足を運んでくれることは、生徒たちにとって大きな励みになった⁽⁴⁾。

生徒たち自身は、こうした活動に関わることを、通常の学校生活や部活動以上に「厳しい」「きつい」と捉えている。部活動では、見知ったメンバーの間で意思疎通もできる。しかし情報宣伝活動では、初対面の人に自分の考えを伝えなければならない。またワークショップでは、年齢や立場が異なる人とワークをすることで、自分が抱えている緊張や、苦手さに気付いたという声があった。このように、学校や家庭、友人関係だけではなく、地域の人のさまざまな「目」にさらされることで、生徒たちは成長している。

地域からの幅広い参加を呼び掛けるために、便所くんのプロジェクトメンバーであることを意味するバッジを製作した。これはワークショップの参加者に配布されたり、七ツ寺の公演で販売されたりした。七ツ寺公演では、プロジェクトのオリジナルTシャツも販売された。

継続的な参加を呼び掛けるために、便所くんプロジェクト実行委員会の集まりも持たれた。さらに気軽な参加の手段として、サポーター制度も提案された。七ツ寺での公演の会場設営などで人手が必要な際などに、メーリングリストを用いて参加を呼びかけた。

甲村敬司さんは、2月9日に行われた愛知教育大学での「便所くん」公演をきっかけにプロジェクトに参加した。そこで演劇部の生徒が語った言葉が甲村さんには忘れられなかった。「不登校をしているとき、街で通り過ぎながら自分を見る大人の目が嫌いだった」。青少年を対象とした活動に積極的に関わる甲村さんだったが、自分も同じような「大人の目」で子どもを見ていたかもしれない。上から見下すような目、本気がかかわるつもりがないのに、興味本位で一瞥する目。そんな目をしていたかもしれない自分を見直し、プロジェクトのメンバーと平場でつながるために、甲村さんは3月15日の実行委員会に参加した。以後、実行委員会や宣伝活動、オブジェ製作、七ツ寺公演に継続的にかかわっている。

実行委員会以外の参加者からも、「生きづらさ」を自らの課題として捉えた声がいくつか聞こえてきた。七ツ寺公演の参加者アンケートから、いくつか主旨を紹介したい。

- 子どものころの自分、今の自分のことを考えながら劇を観ました。
- 自分らしい存在、自分の居場所を見つけること、守ること。人との関わりの中なかで嫌なこと、辛いこと、いろんなことを一度に考えさせられた。最後に便所を封印しなかったのが心に残った。
- 私はトイレのドアあたりにいると感じました。箱人間とも似ていると思いました。ワークショップでは、自分は待つタイプだと思いました。人が演じているのを見ていただけの劇ではなく、自分自身や他者について考える機会をいただきました。

このように、演劇を一方的に観るのではなく、登場人物を自分に結び付けて考えた参加者もいる。また、演劇とワークショップの有機的なつながりを感じた参加者の声は、プロジェクトの成果として貴重である。

5.2 課題

以上のように「生きづらさ」を自覚する人が交流す

ることを試みたプロジェクトだが、一年目であるだけに、思ったような成果を挙げなかった部分もある。今後の課題もいくつか残された。初めての試みならではの試行錯誤の過程もあった。

まず、参加者の広がりについての限界である。学校を離れた市民活動ではあるが、特に周囲のとらえ方として、高校の生徒中心の活動にとどまった部分がある。自分の課題に真剣に向き合っている若者の姿が共感を集め、高校生との交流に魅力を感じて、ワークショップや演劇に足を運んだ人が多い。反面、刈谷東高校以外から継続的に参加した人が、上述の甲村さんら、少数の人に限られた。より多様な人々、世代の違う人々の「生きづらさ」が交わることになれば、プロジェクトの意義は大きくなるだろう。

また、活動分野が異なる参加者や、多様な活動を結びつけようとする活動であるが、十分な連携が取れなかったり、思いのすれ違いが生じたりした場面もある。

オブジェ製作を担当した愛知教育大学の造形文化コースには負担が集中した。過密な日程の中で、一般の参加を受け入れる余裕はあまり残されていなかった。

こうしたオブジェ製作やワークショップの成果が集めたのが、七ツ寺スタジオでの演劇の上演である。しかし、演劇の上演や、そのための舞台設定にはさまざまな条件が課される。美術棟で製作された舞台の内装をどのように生かすのか、上演の3日間のあいだに試行錯誤があった。事前に考えたよりも控え目な形でしか使われなかった内装もある。

また毎回、演劇の上演後にもワークショップが行われた。しかし内部では、演劇を見た人全員が参加することにより、却って散漫になったという感想も聞かれた。2日目からは休憩をはさみ、希望者のみが参加する形を取った。

最後にパレードでは、プロジェクトのメッセージを伝えるオブジェが商店街を練り歩いた。ここには、メッセージを伝えることの楽しさと難しさの両方が、象徴的に現れたように思われる。

反省会では、オブジェが商店街を歩くだけでは、初めて見た通行人にはプロジェクトの趣旨が伝わりにくかったのではないかという声があった。他方、プラカードやチラシによって説明しなくとも、参加者が通行人に語りかけることによって、多くの新たな出会いが生まれた⁽⁵⁾。

以上、2008年8月の七ツ寺公演に至る便所くんプロジェクトの動きを報告してきた。便所くんプロジェクトは3年間の活動が予定されており、以上は一年目の姿にすぎない。今後、多様な生きづらさを持つ人の交わりをめざし、孤独になりがちな高齢者、精神障害者、引きこもる子を持つ親などをテーマにした演劇の製作・上演が計画されている。

便所くんプロジェクトをめぐる主な動き（2008年）

- 2月9日（土） 愛知教育大学主催「不登校を感じる」（演劇「便所くん」公演とワークショップ）
- 3月15日（土） 第1回 便所くんプロジェクト実行委員会（愛知教育大学）
- 4月5日（土） 第2回 便所くんプロジェクト実行委員会（愛知教育大学）
- 4月12日（土） 岡崎でのワークショップ
- 4月19日（土） 安城でのワークショップ
- 4月26日（土） 知立でのワークショップ
- 4月27日（日） 名古屋市立高針小学校子ども会主催のワークショップ
- 4月28日（月） NPO 法人エンド・ゴール主催のワークショップ
- 5月3日（土） 第3回 便所くんプロジェクト実行委員会（愛知教育大学）
- 5月10日（土） 刈谷でのワークショップ
- 5月17日（土） 豊田でのワークショップ
- 5月24日（土） 知多でのワークショップ
- 5月28日（水） 愛知教育大学授業「地域づくりと生涯学習計画」でのワークショップ
- 5月31日（土） 刈谷病院「第4回あったかハートまつり」にNPO 法人青ねこくらぶと「猫のしゅうかい場」出店
- 6月4日（水） 春日井市立高座小学校主催のワークショップ
- 6月7日（土） 第4回 便所くんプロジェクト実行委員会（愛知教育大学）
- 6月21日（土） 同朋高校主催のワークショップ
- 6月28日（土） 愛知教育大学教育実践総合センター主催のワークショップ
- 7月5日（土） 名古屋市北区でのワークショップ
- 7月12日（土） 名古屋市南区でのワークショップ
- 7月13日（日） 知多で演劇「Making of『赤い日々』の記憶」上演
- 7月19日（土） 豊田で演劇「Making of『赤い日々』の記憶」上演とワークショップ
- 8月2日（土） 名古屋市北区でのワークショップ
- 8月7日（木）・13日（水）・15日（金） オブジェ製作一般参加（愛知教育大学美術棟）
- 8月22日（金）・23日（土）・24日（日） 便所くん公演（七ツ寺共同スタジオ）

注

（1） 高等学校での中退や不登校について、中途退学者数は平成18（2006）年度に77,027人で、在籍者数に占める割合は2.2パーセントとなっている。不登校生徒数は同じ年度では57,544人、在籍者に占める割合は1.65パーセントである。いずれも文部科学省の

平成18年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」による。

（2） 高等学校（全日制・定時制）卒業後の進路について、平成19年3月には大学進学者が58万7,393人（51.2%）、専修学校などへの進学者が29万8,857人（23.7%）、就職者が21万1,108人（18.4%）、一時的な仕事に就いた者が1万6,355人（1.4%）、5万9,928人（5.2%）となっている。

（3） 「ひきこもり」を、どのように社会一般の課題として考えるのか。それは容易でないテーマである。深刻な「ひきこもり」は、確かに、多くの人が経験する問題とはいえない。しかし、ひとつの環境に順応しすぎることが、逆に変化に弱い人間性をつくることは容易に想像できる。ひきこもった人も、こうした過剰同調的な経緯を持っていることは指摘される（川北 2005）。過度な順応がひきこもりを招くとしたら、時に小さな「ひきこもり」を認めるような社会が、逆に深刻なひきこもりを防いでいるといえないだろうか。また、いったんひきこもりを経験しても戻ってこられる社会であるのかどうかは、社会の懐の広さ、温かさのバロメーターである。ひきこもることと社会参加することが、緩やかにつながった社会、これがひきこもり支援の究極的な目標ではないだろうか。それは、ひきこもる人を特別視したり、ひきこもりを単に脱却すべき状態とみなしたりすることでは、実現できない。

（4） 七ツ寺公演でアンケートに答えた96人について、参加のきっかけを見ると、知人や友人の紹介が43人、ワークショップが24人、部員や顧問のPR活動は20人、TVやポスター・HPが18人だった。またワークショップに参加経験があるのは40人、演劇の公演は16人、オブジェ製作は6人だった。

（5） 筆者の一人（川北）は、オブジェが歩くのを見た50歳ほどの女性からパレードの趣旨を尋ねられた。内容を説明するうちに、その女性の親戚の子（30歳代）がひきこもっているという困りごとに話題が移った。結果、10分近くひきこもりの相談窓口について説明することになった。

文献

川北稔, 2005, 「ストーリーとしての引きこもり経験」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』8: 261-268.



写真1 割り箸を使ったワークショップ（愛知教育大学での実行委員会で）



写真4 便所くん公演の内装製作。巨大な「目」をつくる。愛知教育大学美術棟にて



写真2 便所くんオブジェの製作



写真5 便所くんオブジェに願い事を貼り付ける。七ツ寺共同スタジオにて



写真3 便所くんオブジェ製作中のコマ。愛知教育大学美術棟で



写真6 大須商店街でのパレード